



Sounosuke YUKAWA

Tomorrow's medical treatment is supported.

これまでのリウマチ治療は炎症や痛みを抑えたり、悪くなった関節部位を手術で切除していました。今ではすぐれた抗リウマチ薬やバイオ医薬品などの登場で、病気の進行を食い止めて関節の破壊を防ぐ治療が可能になっています

湯川リウマチ内科クリニック

院長 湯川 宗之助

東京都のほぼ中央に位置する武蔵野市は、緑豊かな住宅都市と教育・福祉・健康・文化・スポーツ・情報などの生活型の産業が高度に集積した「生活核都市」として知られる。住みたい街ランキングで常に上位に位置する吉祥寺があり、武蔵境駅周辺地区は亜細亜大学をはじめとした教育施設が集まる文教の街であると同時に、完成度の高いベッドタウンとしても発展を遂げつつありその魅力は増すばかりだ。

暮らしやすさと豊かな住環境が並立する武蔵野市で、平成27年2月に湯川リウマチ内科クリニックが開院した。湯川宗之助院長の明るく誠実で親しみやすい人柄とともに、最新の治療法を駆使した診療の評判を聞きつけて、「理想のリウマチ診療」を求める患者が近隣はもちろん、遠隔地からも足繁くクリニックを訪れる。

診療活動に日夜奮闘を続ける湯川院長は、リウマチに関する医学会発表や講演活動、専門誌への執筆をはじめ、メディアを通じた意欲的な啓発活動にも余念がない。



苦しむ女性患者との出会いからリウマチ専門医の道へ

「リウマチで悩む患者さんに自由な生活を取り戻してあげたい」

湯川院長は平成12年に東京医科大学医学部医学科卒業後、同大学の第三内科（リウマチ・膠原病科）に入局した。

「父も兄もリウマチと膠原病を専門とする医師なので、私は違う分野を志してもよかったのですが」という湯川院長がリウマチ・膠原病専門医の道を選んだのは研修医時代にある患者に出会ったのがきっかけだった。



患者がリラックスできるような室内は空港ラウンジをイメージしている

患者がクリニックを訪れるのは病気を治してもらうためだが、信頼する医師に診てもらうことで不安を解消し、心の安らぎと癒しを得るためでもある。

湯川リウマチ内科クリニックの中に一歩足を踏み入れると、室内はブラウンを基調とした落ち着いた色調で、豊かな採光を取り入れた明るい開放感がみなぎる。月ごとに魚や自然の風景が変わるアクアリウムや、お雛さんやクリスマスツリーといった季節の飾りつけが、クリニックに来院する患者の心を和ませる。

「クリニックを建てる時に、内部の作りは空港のラウンジをイメージしました。もともと私は高所恐怖症なのですが、仕事で飛行機を利用せざるを得ない機会が何度もあります。その際、搭乗前の緊張感を和らげてくれたのが空港のラウンジでした。受診される患者さんは、飛行機に乗る前の私と同じように不安や緊張感を抱えています。定期的な受診が必要で何度もクリニックに



### 院内は空港のラウンジをイメージして建設 院名の「リウマチ内科」に込められた熱い思い

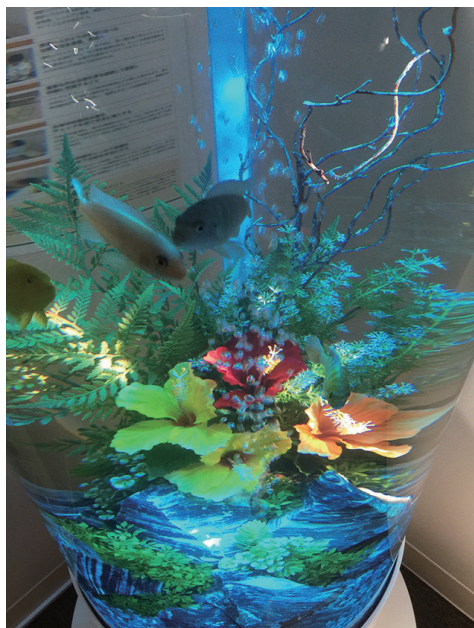
「リウマチを患った20代の女性でした。手の関節が急速に変形していった、箸や鉛筆を使うことすらままならない状態でした。『医師として自分に何がしてあげられるのか』と問わずにはいられませんでした。当時はまだリウマチは治療法が確立されず不治の病とされていたので、少しでも彼女の様な患者さん達を痛みや苦しみから救いたい、自由な生活を取り戻してあげたいと思ったのがリウマチ専門医を目指したきっかけです」と当時を振り返る。

勤務医として東京医科大学病院に8年勤めた後、湯川院長は福岡県北九州市にある産業医科大学医学部第一内科に国内留学し、6年間リウマチ医療の世界的権威である田中良哉教授に師事した。田中教授の薫陶を受けた湯川院長は東京に戻って、平成27年2月に湯川リウマチ内科クリニックを開設した。

「勤務医時代に田中先生の講演を拝聴して大きな感銘を受けました。私はどうしても田中先生の元で勉強したいと直談判し、念願かなって産業医科大学第一内科に入局させていただきました。田中先生は臨床、研究、教育のすべての分野において、何事においても心を込めて打ち込むことの大切さを常に仰っていました。私は田中先生の教えを胸に刻んで、日々の診療活動に邁進しています」

医師のキャリアは、どれだけ多くの患者に真正面から向き合い、真摯に患者の思いを汲み取り、的確に対応すべく研鑽に努めてきたかで決まるといふ。「患者さんを何とかしてあげたい」という想いを起点とした湯川院長のキャリアがこれを如実に物語っている。





毎月変わる風景が患者の心を和ませる

さらに湯川院長は、「病状が進行しても自分のキャリア設計を諦めたり悲観することはありません。リウマチという病について正しい知識を多くの方々を持つてもらい、私たちのクリニックをよりどころにして患者さん自身のQOL（生活の質）の向上を図っていただければと思います」と呼びかける。

湯川リウマチ内科クリニックでは、生物学的製剤をはじめ、最新の治療法を備えて患者のライフスタイルに合わせた最適なりウマチ治療を実践している。

療薬の登場で、炎症や痛みを抑えるだけでなく、病気の進行を食い止めて関節が破壊されるのを防ぐ治療が可能になっています」と話す湯川院長。

患者の集まりであるリウマチ友の会が5年ごとに実施している「リウマチ患者の実態調査・2015年リウマチ白書」によると、56・3%の人がリウマチのために「職業生活に影響があった」と答えている。また51%の人が「退職・休業・廃業を余儀なくされた」という。

「女性の社会進出が進んでいます。女性にとって30〜50歳代というのは男性と同様働き盛りの年代です。妊娠や出産、子育てなど女性ならではの負担や不安、悩みも多いでしょう。関節の痛みや炎症がない状態を維持するためには、適切な早期診断・早期治療が極めて重要なです」と熱く語る。

療薬の登場で、炎症や痛みを抑えるだけでなく、病気の進行を食い止めて関節が破壊されるのを防ぐ治療が可能になっています」と話す湯川院長。

リウマチは関節、骨、筋肉などの運動器に痛みや炎症を起こす病気の総称だが、一般的に「関節リウマチ」をイメージすることが多い。「関節リウマチ」は、免疫異常によって起こる膠原病の中で最も患者数が多く、その数は約80万人にのぼると言われる。また、高齢者に発症しがちだと思われるが、実際は30〜50歳代の女性に多いのが特徴だ。

「一般的に以前のリウマチ治療では、薬で炎症や痛みを抑えたり、悪くなった関節部位を手術で取り除いていました。しかし現在は、すぐれた抗リウマチ薬やバイオ医薬品といった新しい治



### 「治療すれば治せる病気」になった関節リウマチ 新しい治療との出会いが患者のQOLを高める

来ることになります。少しでも患者さんの不安や緊張を和らげくつろいでいただければという思いで院内を設計しました」

クリニックの院名を「湯川リウマチ内科クリニック」としたことに、リウマチの治療にかけると湯川院長の診療にかけられる格別な想いが込められている。

「日進月歩と言われる医療技術ですが、なかでもリウマチの診断・治療はここ10年で長足の進歩を遂げてきました。かつては不治の病とも言われていましたが、今では疾患が落ち着いて日常生活に支障がない寛解と呼ばれる状態を目指すまでになり、完治することも夢ではない病気になってきています」という湯川院長。

「大きな病院でなくとも、身近にあるクリニックで専門的な治療が受けられることを地域の方々に知っていただくために、敢えて院名に『リウマチ内科』の文言を入れました」と説明する。



**リウマチの名医による最先端のリウマチ治療を提供  
地域格差ゼロの診療を目指して病診・診診連携を促進**

医療の高度化に伴って専門分野が細分化され、一つの医療機関だけで医療を完結するのではなく、「病院とクリニック（診療所）」や「クリニック（診療所）同士」の連携が非常に重要となってきた。しかし、患者側からすれば他院を受診するとかかりつけ医を疑っているような気がしたり、セカンドオピニオンをするにしてもどの医療機関に行けばいいか分からないということがある。湯川院長はこうした不安を解消するため、患者本位に立った分かりやすいシステムづくりに力を注ぐ。

今、医療で重要なテーマとなっているのは、医療機関の中でスタッフが一丸となって治療に取り組むチーム医療の体制だ。そして、大学病院や総合病院、地域のクリニックがスクラムを組んで、患者さんを中心とした地域医療連携の確立である。湯川リウマチ内科クリニックではリウマチ内科の強力なチーム医療体制を敷いている。

「当院では、顧問先生として恩師でありリウマチの権威である産業医科大学の田中良哉教授、特任客員医師として和歌山県立医科大学附属病院リウマチ・膠原病科の湯川尚一郎講師、慶応義塾大学病院リウマチ内科の山岡邦宏教授をお迎えしています。リウマチ診療の第一線の先生方にクリニックで診療していただくことは全く新しい試みで、地域格差ゼロのリウマチ診療を目指す上で大変意義深いことだと思います」と湯川院長は強調する。

リウマチ・膠原病疾患は全身疾患であり、幅広い内科知識が必要だ。湯川院長は総合内科専門医の視点から内科疾患全般の診療にも力を注いでおり、病院との連携（病診連携）、診療所同士の連携（診診連携）を推し進めて地域医療の振興に貢献している。



**適切な治療で生活の質を高め、完治に向け共に歩む  
血の通った診療で地域医療に邁進する信頼のホーム・ドクター**

クリニック開設以来、多くの患者や地域の人々に親しまれてきている湯川リウマチ内科クリニックだが、湯川院長はリウマチで苦しむ患者が決して悲観することなく、適切な治療によって生活の質を高め、完治への可能性を共に追求していこうと呼びかける。



無限の可能性を意味するメビウスの輪をモチーフとしたロゴマーク

「かつて肢体の自由を奪う不治の病としてポリオが大変恐れられました。私の身近な親族に、4歳という小さい時期にポリオによって両下肢の自由を奪われてしまった人がいます。しかしその翌年、有効なポリオワクチン接種が日本で始まり、現在では日本からポリオは撲滅されています。ワクチン接種の開始がもう少し早かったらと、悔やまれてなりません。リウマチ診療には、早期に適切な治療を受ければ痛みや苦しみを軽減でき、生活の質を失うことなく過ごすことができるというパラダイムシフトがもたらされています。こうした現実を知ることなく治療を受けている方がいなくなることを願っています」



## PROFILE 湯川 宗之助 (ゆかわ・そうのすけ)

昭和50年生まれ。東京都出身。平成12年東京医科大学医学部医学科卒業後、東京医科大学病院第三内科、産業医科大学医学部第一内科学講座を経て、平成27年2月に湯川リウマチ内科クリニックを開院。

### 所属学会・団体

日本内科学会、日本リウマチ学会、日本免疫学会、日本感染症学会、日本臨床免疫学会、日本臨床リウマチ学会、日本炎症・再生医学会、日本骨代謝学会、日本医師会、リウマチ友の会特別会員、東京都医師会、武蔵野市医師会。

## INFORMATION 湯川リウマチ内科クリニック

**所在地** 〒180-0023  
東京都武蔵野市境南町3-14-6 山桃ビル3F  
TEL : 0422 - 31 - 1155

**アクセス** JR中央線武蔵境駅南口から徒歩5分

**設立** 平成27年2月

**診療科目**

- リウマチ・膠原病・自己免疫性疾患（対象となる疾患）  
関節リウマチ・リウマチ性多発筋痛症・全身性エリテマトーデス（※）、多発性筋炎（※）、皮膚筋炎（※）、混合性結合組織病（※）、シェーグレン症候群（※）、ベーチェット病（※）、脊椎関節炎（乾癬性関節炎など）、サイコイドーシス（※）、線維筋痛症、悪性関節リウマチ（※）、結節性多発動脈炎（※）、顕微鏡的多発血管炎（※）、成人スチル病（※）、全身性強皮症（※）、高安動脈炎（※）、多発血管炎性肉芽腫症（※） ※指定難病
- 内科（対象となる疾患）  
急性疾患・風邪、上気道炎、気管支炎、尿路感染症、インフルエンザ、花粉症、頭痛・発熱・アレルギーなど。生活習慣病（高血圧症、高脂血症、糖尿病、高尿酸血症・痛風、肥満・メタボリック症候群など）、喘息、逆流性食道炎、胃炎



**診療時間**

- ・月・火・木・金（9：00～13：00、14：00～18：00）
- ・土（9：00～13：00）
- ・休診日：水曜日、日曜日、祝日

ネット社会の進展で様々な情報が氾濫している今日、医師がどういう考え方のもとにその医療を取り入れているか見極めることが患者側にも必要だ。

「現在、リウマチ治療は幅広い選択肢の中から選べるようになりました。患者さんの生活背景や経済状況など様々なことを考慮しながら、私たちスタッフが安心安全な治療を提供していかなければなりません。不治の病と言われたポリオが日本から撲滅できたように、リウマチで苦しむ方が日本から一人でも少なくなる事を、そしていなくなる日を私は望んでいます。その一助になれるよう、これからもリウマチ専門医として研鑽を重ね、患者さんと共に歩んでいければと思っています」

湯川院長は一人でも多くの人がリウマチ治療について正しい認識をもってもらうと、啓発活動を意欲的に取り組んでいる。

地域に根差し、地域の人々の健康で明るい暮らしをサポートすることを主眼に、心の通いあう医療に邁進する湯川院長の飽くなきチャレンジが続く。